

環境にも精通する構造家 澁谷亜紀子

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ 構造設計に行き着くまで

覇志堂が明るく対峙するのは、構造家の澁谷亜紀子さん。一人息子が建築関係の事務所に勤務していると聞いて、幼い頃の姿を思い出し、時の流れを感じたようだ。小さいころから絵を描くのが好きだったという澁谷さん。一方で、絵で食べていくのは難しいとも感じていた。また、土木コンサルを生業としていた父の影響もあり、化学科へと進学を決め、上智大学に入学したが、分子の厚みを測るなどの実験が致命的に肌に合わないと感じる。澁谷さん曰く「挫折」して、翌年早稲田大学に入り直した。アーキテクトを目指す周りとは一線を画して環境系の研究室へ進む。実は製図室の冷房もない劣悪な環境での授業が引き金になったのかもしれない。また、都市のヒートアイランド現象に興味をもったため、尾島俊雄研究室を選んだのでした。『熱くなる大都市』（NHKブックス）は尾島俊雄さんの名著である。

大学院への進学を希望していたら、尾島教授が当時東京大学におられた村上周三先生を推薦してくれた。村上先生の下であったという間の2年間を過ごしたのでした。学生時代は構造設計は結局選ばず先輩の手引きもあり、間組の意匠設計部に就職した。腰掛けではないのが、澁谷さんがキャリアを積む凄いところで、3年弱勤務したのです。

その後、渡辺邦夫さんとの出会いSDGで構造設計への一步を踏み出すことになる。当時は、現東京大学教授の腰原幹雄さんや構造家・徐光さんが在籍されており、厳しい背中を見ながら励んだ。SDGでは、提案は3案以上出すべ

きと教えられ、今でも教訓にしている。

■ 転身が学びを活かす

当時のSDGは海外でのプロジェクトも増えてきた時期であったが、成長期の息子さんがいらした事情もあり、約11年かかわったSDGを離れる決断をした澁谷さん。

“構造を軸に攻めきるためには、ものづくりの現場を見たい”という想いで、戸田建設の門を叩く。また、許容応力度の限界に挑戦し続けてきたSDGとは違う、より汎用性の高い構造設計に携わりたいという考えもあったという。ゼネコン設計部という環境では、担当プロジェクトの設計だけでなく、サポート的な構造解析や書類作成もお願いされることが多々あり、構造設計者としての幅が広がったといいます。

在職中は医療施設を担当することが多く、特に陽子線治療施設が思い出に残っている。RCの壁厚が1,500mmある特殊な建築であったが、複数案に対応するというSDGでの経験も活かすことができた。

そして、2023年に約16年間の勤務に区切りをつけてプランテックに移籍を決めた澁谷さんなのだ。覇志堂がストレートに「プランテックで何をしたい？」と。「夢のある設計をしていきたい」と明快な返答が返ってくる。意匠設計部・アトリエ構造設計事務所・ゼネコン設計部と、多様な立場で建築設計にかかわってきたが、これからは基本設計を主体に仕事がしたい。また、環境配慮が建築にも求められる昨今では、学生時代に学んだ環境的な視点も活かしていきたい。意匠・構造・環境の垣根を超えて、さまざまな視点をもって建築に携わりたいという澁谷さん。知識と実践を積み重ねてきた澁谷さんのキャリアがプランテックで一層花開くことが待ち遠しい。

洋裁や植物栽培が趣味という澁谷亜紀子さんは、楚々とした雰囲気からも「環境フレンドリーなんですよ」と語るのが似合う人だ。「地球に貢献したい」ともいえる構造家が、女性であることが未来への希望を感じさせるのです。

